

## 01-022

### 幼児期の遊び場の有無が遊びの内容や方法等に及ぼす影響

澤田 孝二、澤田 由美

山梨学院短期大学 保育科

#### 【はじめに】

短期大学生を対象として、幼児期の遊び等について調査し、幼児期に安心して遊べる場が多かった者とそうでない者で違いがないかどうかを分析した。

#### 【方法】

2013年に短期大学生を対象に、幼児期の遊び場、遊び仲間、遊びの内容、その後の運動への取り組みなどについて調査し、回答の得られた175名分を分析した。分析は、幼児期に安心して遊べる場所がたくさんあったと回答した73名を遊び場あり群、残りの102名を対照群として、両群の回答結果を比較した。

#### 【結果と考察】

安心して遊べる場所が『たくさんあった』が4割強、『少しあった』が5割強、『ほとんどなかった』が6%であった。

外遊びと室内遊びのどちらが多かったかという質問では、両群とも『外遊び』『外遊びと室内遊びが半々ぐらい』『室内遊び』の順で多かった。両群で『外遊び』と回答した者の比率に有意差が認められた。

外遊びでは『固定遊具』が最も多く、『おにごっこ』『ボール遊び』と続いた。遊び場あり群では体を活発に動かす遊びが対照群に比べ高率であった。

遊び友達が『たくさんいた』という回答は、遊び場あり群では最も多かったが、対照群では『少しいた』という回答が最も多かった。

主な遊び相手は『友達』という回答が最も多く、『兄弟姉妹』『親』と続いた。

遊び相手の年齢は『同年齢』が最も多く、『年上』『年下』と続いた。遊び場あり群では『同年齢』が対照群に比べ高率であった。

遊び場所は『公園』が最も多く、『家』『校庭』と続いた。『公園』という回答は遊び場あり群で、『家』という回答は対照群で高率であった。

中学・高校時代の部活動では、中学・高校とも『運動部』が最も多く、『文化部』『なし』と続いた。『運動部』という回答は遊び場あり群が対照群に比べ高率であった。

大学入学後の運動の機会は、『週1日かそれ以下』が最も多く、『週2～3日』『なし』と続いた。週2日以上運動している者の比率は、遊び場あり群が対照群に比べてやや高い傾向にあった。

#### 【まとめ】

幼児期に安心して遊べる場所が十分にあった者ほど、遊び友達にも恵まれ、戸外での体を使った遊びに積極的に取り組む傾向にあることや、学童期以降においても身体活動に積極的に取り組む者が多い傾向があることなどが明らかになったが、子どもの健全な発育発達や後の健康生活のためにも、幼児期から安心して遊べる環境を十分つくっていくことがきわめて重要であると思われた。

## 01-023

### 災害共済給付データを用いた「むかで競走」における負傷事故データの分析

楠本 欣司<sup>1</sup>、西田 佳史<sup>1,3</sup>、北村 光司<sup>1,3</sup>、大野 美喜子<sup>1,3</sup>、山中 龍宏<sup>1,2,3</sup>、米山 尚子<sup>4</sup>

<sup>1</sup>国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人工知能研究センター、<sup>2</sup>緑園こどもクリニック、

<sup>3</sup>Safw Kids Japan、

<sup>4</sup>独立行政法人 日本スポーツ振興センター

#### 【緒言】

学校管理下の集団競技種目の負傷事故が多発しており、その予防安全対策が近年急務とされている。

#### 【目的】

複数人の体が相互に拘束される集団競技種目の一つである「むかで競走」で発生した負傷事故を分析する。

#### 【方法】

日本スポーツ振興センターが保有する災害共済給付データ(2014年度)を用いて、「むかで競走」で発生した負傷事例2205件を分析した。分析の項目は(1)学校、(2)性別、(3)場面、(4)負傷の部位、(5)負傷の種類、(6)負傷者の位置、(7)負傷の原因、(8)転倒要因の記載の有無とした。

#### 【結果】

(1) 小学校86件、中学校1879件、高校240件であった。(2) 女子1409件、男子796件であった。(3) 正課授業中や朝・昼休み・放課後を含めた練習中1887件、運動会当日318件であった。(4) 下肢部1281件、上肢部580件、頭部・顔面部250件、体幹部222件、頸部45件であった。(5) 捻挫・靭帯損傷880件、骨折・骨損傷492件、打撲462件、挫傷317件、挫創243件、頭部外傷・脳震盪46件、脱臼・亜脱臼24件、その他283件であった。(6) 先頭247件、最終尾76件、先頭や最終尾以外73件、不明1809件であった。(7) 転倒1903件、衝突・接触154件、捻る57件、引っ張られ15件、紐類による擦れ9件、その他39件、不明28件であった。特に転倒後は床・地面にぶつかる466件、捻る410件、下敷き330件、手をつく212件、擦りむく80件、引きずられる43件、詳細不明362件で負傷していた。(8) 転倒を誘発した明らかな要因964件、不明確な要因939件であった。転倒要因には、ゴール手前・直後、カーブ・コーナー、スタート時など「場所の違いによる要因」、スピード・勢いや急発進・急停止など「動作の変化による要因」があった。

#### 【考察】

全国規模のデータを分析した結果、「中学生、女子、練習中」に負傷が多発していることがわかった。また、報告書に詳記されてある「災害発生の状況」を分析することで受傷機転の特徴が明らかになった。しかし現状の災害給付報告書では不十分な記載内容もあり、予防に活用できるように入力方法の改善が必要である。

#### 【結言】

学校管理下で行われる拘束型集団競技運動の負傷事故の特徴を明らかにした。予防を考慮した科学的な指導方法や器具の開発が必要であり、今後は予防策の提案および効果検証を体育教員のみならず専門職であるアスレティックトレーナーなどと連携して行い、予防啓発ツールの開発につなげたい。